
記憶喪失の異世界人

超常毎日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶喪失の異世界人

【Nコード】

N0113X

【作者名】

超常毎日

【あらすじ】

気がつくところか知らないところについていた中汰英千は記憶喪失になっていた。自分を助けてくれた水崎玲奈はここは魔法で戦いが起こると言っている。そんな中、英千は神々しい魔力を放っているのである。

動き出す異世界。そして、英千は記憶を取り戻せるのだろうか。

記憶喪失の異世界人の誕生

「君は何者？」

中汰英千は、気がつくといく部屋の上のベッドの上でいた。

「私は、水崎玲奈。牢屋であなたを助けた人よ」

水崎玲奈と名乗る少女は、どうやら英千を牢屋から助けたらしい。

「え？牢屋」

「そう。ガレンド牢屋。世界最大にして最凶の牢屋」

英千は記憶を探る。しかし、

「あれ？俺ってなにか罪を犯したっけ？」

記憶が無いようだった。

「あなた、まさか……記憶喪失？」

「ッぽいね」

これは、まいったと言わんばかりの顔をする玲奈だった。

「分かったわ。最初から話すわ」

お困りのようだった。

「私がガレンド牢屋の近くを飛んでいたら、1つだけ神々しい魔力を持っている人を見つけたの。この魔力は絶対に悪い人ではないと思っただけで……」

英千はいきなり混乱していた。

「あ……えっと、俺がわかる範囲では空を飛んだり、魔力とか知らないんだけど……」

英千は記憶喪失だが、わずかに記憶があるようだった。

「俺が覚えている最後のことは……自殺だった気がする」

「どうやら、英千は自殺をしたのにもかかわらず生きているようだった。」

「自殺？でも、それなら死んでいるはずじゃないの？」

当然の質問をする玲奈。

「それが分かったら苦労しないよ……」

途方に暮れる英千だった。

「にしても、なんで俺は牢屋に入れられていたのだろうね？」

「私に分かるわけじゃないじゃない」

当然である。

「そういえば、あなたの名前は？」

「高校2年生の中汰英千。趣味はありません」

「得意な魔法は？」

「俺は、魔法なんて使えないよ」

「うそっ。でも、今でも神々しい魔力が出ているけど」

「だから、知らないって」

英千はどこに來たのか、どうやってここにいるのかも分からないのである。

英千は玲奈にこの世界について教えてもらった。

「じゃあ、ここはブリゼン王国の名門学校のワリユナ高校ってわけ」

「そう」

「そして、この世界では魔法が使われている」

「そう」

「人々は、魔力による戦いが絶えない」

「そう」

「因みに俺は、神々しい魔力で今だ発見されていないような魔法を使えるかもしれない」

「おわかり？」

「まあ、何となく分かったけど俺が何で記憶がないとか、前のわずかな記憶では魔法はないことになっているとかの説明は？」

「ということは、もしかして、まだ分からないけど……あなたは違う世界からこっちの世界に飛ばされたとか？」

誰もが信じることはないだろうと思う言葉だったが、英千は真剣に考えた。

「まさか」

しかし、信じられない。

「でも、魔法がないって分かっていることは違う世界ってことじゃないの？」

確かに。と納得する英千。

「ありえるな」

「でも、まだ分からないし調べる方法もないから……とりあえずここにいたら？」

それに2年生は明日からだし。と付け足す玲奈に、

「でも、転校手続きとかお金とかは？」

と、悩む英千。

「それは、私が何とかするけど……」

「そんなの悪いよ。見ず知らずの奴にお金を渡すなんて」

英千の言うことはごもつともだ。

「でも、こんな魔力を持っている人を見捨てるなんて神を見捨てることと同義だから絶対にできないよ」

玲奈の目を見て英千は諦める。

「分かった。でも、どうやってお金を返せばいい？」

英千はたかが、高校2年生の人間だ。何かが出来るわけではない。

「じゃあ……私に着いてよ」

「着くって？」

「2年生になると任務が与えられるの。でも、最低2人で組まないといけないの。で、私と組んでくれる人が誰もいなくて困っていたところ君が現れた。君は成長したら強くなりそうだし、どう？一緒に組まない？」

と、予想する玲奈。

「でも、それだけでいいの？」

「もちろん。でも、戦ってもらう時は一緒に頑張ってね」

戦うってどういうことか分からなかったが、

「分かった。でも、この世界にいつまでもいたら家族が心配するだろうから帰る方法を探しながらいいよ」

「よし。じゃあ、交渉成立ね。さっそく転入手続きをしないとね」
英千と玲奈はそう言って校長室に向かっていった。

「英千君は異世界人かもしれないと」

「まだ分かりませんが」

ワリユナ高校の校長、オリマは若いながらたくさんの出来事があったらしいがこれは1番の驚きだった。

「そうか……。じゃあ、とりあえず転入は認めるが他人にこのことは絶対に言わないと誓う？」

「はい。言ってもメリットないですしね」

「今は魔力で世界が動く。まだ未知力の君を外国に出すわけにはいかないからな」

「はい」

「そして、水崎君。君は英千君から神々しい魔力が出ているといったね」

「いまもでています」

「私には出ているようには見えないのだが？」

「どうやら、英千の魔力は玲奈しか見えないようだった。」

「まあ、水崎君が嘘をつくとは思わないけどね。まあ、この件は私が調査しておこう」

「ありがとうございます」

英千は今すぐにでも寝たい気分だった。しかし、

「あ、校長。任務のペアの件ですが」

「ああ、あれは今日までだったな」

「私は英千と組んでいいですか？」

「君と相性いい人はなかなかいないだろうからな。いいだろう。許可しよう」

「ありがとうございます」

「そういえば、俺がこっちに来た時も相性いいとかいていたな。と思うだす英千。」

「失礼しました」

2人は校長室をでる。パタン。とドアを閉じる音がして玲奈は英千に話しかける。

「というわけで、今日から英千と私はペア。頑張りましょう」

うん、とうなずく英千だが、ふと思う。

「そういえば、俺の部屋は？」

ないね。と以心伝心する2人。

「しょうがないんじゃないの。廊下で寝るとか、あるじゃない」

英千は180度体の向きを変え、校長室のドアを見る。そして、

「校長。助けて」

英千はしばらく泣きやまなかったという。

「とにかく、1部屋借りたけど期限が1カ月だからそれまでに対策を考えないと」

英千は校長に部屋を借りた。

部屋は学校にあり、ワリユナ高校は割と大きいので生徒全員が部屋を借りている。

「でも、部屋は広いな」

そんな驚きを抱いていると、

「うわっあ」

英千にすさまじい頭痛が起こる。まるで、脳細胞があの手を思い出そうと必死になっているようだった。

「何だ……これは」

頭の中に映像として何かが現れる。

「これは、パーティーか」

頭痛は治まり映像に必死になる。

「大人がいっぱいいて、誰かがスピーチしている……うわあ」

再び頭痛が英千を襲う。

「はあはあ。でも、なんだったんだろう。今のは」

いきなり映像が出てきたと思ったらしいいきなり消えるし。流石にこ

れが続くと困るなあ。と思う英千であつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0113x/>

記憶喪失の異世界人

2011年9月25日03時14分発行